



TITLE:

天文語彙 : 天界第一號附録

AUTHOR(S):

海老, 恒治

CITATION:

海老, 恒治. 天文語彙 : 天界第一號附録. 天界 1920, 1(1): 1-4

ISSUE DATE:

1920-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159507>

RIGHT:

天文語彙

海老恒治編

あの部

あかほし赤星(Red Star) 色の赤い恒星。此種の星は四五十年前から變光星學者の特に注意を惹いたものでシユミット、スキエレルプ、バーミンガム、エスピン等が夫々赤星の目錄を發表して居るエスピンの最新版に由れば赤星の總計約千五百個となつて居る。殆ど總て銀河に近く分布し變光するものが頗る多い。實際長週期變光星の大部分は多少の赤味を帶びないものはない。分光學上から見れば赤星はセツキ式第三型と同第四型とに分類される。アンターレス、ベテルギウス、アルデラン等は前者に屬し、双魚座の第一九番星等は後者に屬する。(星の進化參照)

あけのみやうじやう曉の明星(Morning Star) 朝早く東天に輝く時の金星を云ふ。(金星を見よ)

アケルナール(Achernar) エリダヌス座アルファ星。

赤經一時三四分、赤緯南五七度四五分、光度〇・六分光型B。毎年十二月頃日没後南方に低く見ゆる。距離六五光年。

アダムス(J. C. Adams) 英國劍橋大學教授。若い頃天王星の運動を理論的に研究して、始めて海王星の存在する事に思ひ至り、一八四五年之を發表した。此論文は始め學界の注意を惹かなかつたが、後佛國のルベリエー、獨逸のガルレ等の活動と共に大いに認められ、實に海王星の理論的發見者たるの聲譽を博するに至つた。其後劍橋大學に於て天體力學の講座を擔當しニュートンの後繼者として尊まれた。一八一八^九生(海王星參照)

アナクシマンデル(Anaximander) 古代ギリシャの哲學者乃至天文學者、ミレトス派ターレスの後を受けた人で、世界は圓柱狀で大海の中に浮んで居るとし天は無限大の球であると考へた。(紀元前六七死)

アピアン (Apian) 中世の天文學者で彗星を多く觀測し、其尾が常に太陽の反對の側に向いて居るのを注意した。(一四九五生、一五五二死)

アブル、ウェーファ (Abul-Wefa) アラビアの天文學者、バグダッドで觀測した。月の運動中に前人未知の一變動 (Variation) あるを發見した。(テヒビヨ及月を見よ) 尙アルマゲストと呼ぶ書物を著した。(九三九生、九九八死)

アベラシオン (Aberation) 光の速度が有限である事と觀測者が動いて居る事のため、星の位置が實際よりも少しく移動して見ゆる現象で物理學上光行差とも云ふ。一七二六年英人ブラッドレーが龍座ガンマ星の視差を觀測中偶然發見したものである。大部分は地球の公轉に原因するものである。現今各國の天體曆で用ゐて居るアベラシオン常數は二〇・四七秒で、一八九六年バリ會議に由つて決定せられたものである。

アポロニウス (Apollonius) 紀元前三世紀ギリシヤ天文學者、遊星の運動を説明するため周轉圓 (Epicycle) 説を始めて唱へた人である。

あまのがは天の河 (Milky way) 一名銀河。天球を廻る一大光帶である。肉眼では單に一連の白雲のやうであるが、望遠鏡が發明されて之は無數の微小星が密集して居るのだと解つた。大體に於て大圓に沿ふて居るが處々幅が細く或は太く、殊に鷲座からセンチウル座邊迄二つに分れて居る。全天の星は其分布の具合が一樣でなくて、著しく天の河に密集して居るため、十八世紀以來天の河は宇宙の構造上非常に意味のあるものだと思へられた。大ハーシエルは天の河が我が宇宙の本體だと思へたが、今も尙此の考へは餘り間違つて居ない。種々の天體の中で特に天の河に密集する星が随分ある。比較的若い星は總て其例に漏れず、其他新星、變光星、瓦斯星雲等皆然り。尙近頃暗黒星雲等も天の河に發見されるに至つた。要するに天の河は星の數が多い丈それ丈種々の天體、珍らしいものや變つたものが多い。近頃は宇宙の構造上から星の位置を表はすのに天の河を基本として銀經、銀緯を使ふ事がある。天の河の廣がりに就いては未だ説が一定して居ないが、凡そ一萬光年

位迄達して居るらしい。

アラゴ(F.J.D.Arago) バリ天文臺長(一八三〇—

一八五三) 地磁氣及極光に關する研究をした。

(一七八六生
一八五三死)

アラビアの天文學(Arabian Astronomy) ヨーロッ

パの暗黒時代アラビア王ヤマールがアレキサンドリア市を占領(六四一年)して以來ギリシャの天文學はアラビア人の手に移つた。特にアル・マンスール(Al-mansur) ハルーン・アル・ラシッド(Harun Al-Rasid) アル・ヤムーン(Al-Mamun)の諸王は大いに天文學を奨勵し天文臺の設立トレミー天文學書の翻譯、學者の養成等をやつた。従つて國內到る所學術隆盛で、アル・バタニ(Al-Battani) トビト・ベン・コラ(Iobit-ben-Korra) アル・スーフイ(Al-Sufi) アブル・ヴェファ(AbulWefa)等は最も有名な天文學者である。アラビアの天文學は歐洲の文藝復興期迄其生命を續けたもので其間に學說の進歩發達は殆んど認められないけれど實際觀測上に見るべきもの多く代數や三角術を天文學に應用した點に於て其功績頗る大である。星の名等に今尙アラビ

ア名が多く用ゐられる。例へばアルデバラシ・アルタイール等の星名やアルマナツク・アルゼブラの如き星名が之れである。

アリエル(Ariel) 天王星の一衛星。一八五一年ラッセル之を發見す。天王星を約二日一二時間で一周する。(天王星を見よ)

アリストタルコ(Aristarchus) 古代ギリシャの天文學者サモスの人。地球は太陽の周圍を公轉するものと云ふ考を始めて主張して學界を騒した。實にコペルニクスの先驅である。(紀元前二三〇頃生)

アリスティルス(Aristyllus) 古代ギリシャの天文學者。紀元前第三世紀の頃アレキサンドリアに於てチモカリスと共に黃道の星を觀測した。(ヒバルコスを見よ)

アリストテレス(Aristoteles) ギリシャの大哲學者。プラトンの弟子で哲學及自然科學の大組織に成功した人である。自ら天體觀測はやらなかつたが世界及宇宙に就いては獨特の説を持つて居つて多く後世の學界に影響を與へた。(紀元前三八四生、一七〇死) (トレミー及コペルニクスを見よ)

アルクトゥールス (Arcturus) 牧夫座アルファ星、

赤經一四時一分、赤緯北一九度四二分、光度〇・二、分光型K。昔から各國の人々の注意を惹いた星で北斗(大熊)の劍先に當つて居る。支那では之を大角と稱へ、西洋では之を「熊の番人」と稱へ方角や曆日を知る時の目標になつた。夏の夕頭上に輝いて色は少しく赤味を帯びて居る。固有運動は頗る大きく一年に二三秒丈西南の方に動く。然し視線速度は一秒五秒で我々に近づいて居るのだから絶対運動としては一秒一五〇秒となる。視差〇・〇七秒、従つて距離四七光年(牧夫座を見よ) **アルゲランデル** (F. W. A. Argelander) 獨逸國ボン天文臺長。始めケーニグスベルヒ天文臺でベツセルに學び一八二〇年其助手とつた。一八二三年から露國オーボー天文臺長、又一八三二年からは同ヘルシングフォルス天文臺長に任じ、遂に一八三七年母國に歸りてボン大學天文臺長となり、死に至る迄前後三十八年間其職にあつた。一八四五年から二、三の助手と共に三吋望遠鏡を使つて九等以上の凡ての星を觀測した結果一八六二年に至つ

てボン星表 (Bonner Durchmusterung) を發表し、次で其翌年圖を作つた。又彼は變光星の研究に秀で多くの新發見及び觀測結果を出した。(變光星を見よ)

アルゴ (Argo) 南天の星座 大犬星座の南に隣つて天

の河の一部分を占領して居る大星座で既にトレミーのアルマゲストに記載されてある。範圍が餘り多きので近年に至り此星座を數個の小部分に分割するに至つた即ち龍骨座 (Carina) 櫓座 (Mast) 鱸座 (Puppis) 羅針盤座 (Pyxis) 及帆座 (Vela) である。冬の夜南方の地平線上に見わる。

アルコール星 (Alcor) 大熊座第八〇番星。頗るゼー

ター星に近く其北西に隣つて居る。赤緯一三時二一分、赤緯北五五度三〇分、光度四〇分、光型Aゼーター星からの距離十二分だから普通の肉眼には明かに二つが並んで見わる筈であるが、昔から之は眼の視力を驗査するために用ゐられた。然し此の二星は距離は近く見わるけれども決して實際相互に近いのではない。